

「大学生心理学」という知の体系化に向けて(1)

—その独自性と青年心理学の視点から—

山田 剛史

奥田 雄一郎

(神戸大学大学院総合人間科学研究科)

(中央大学大学院文学研究科)

筆者らは「大学生心理学」(University Student Psychology)という新たな学知の体系化を志向する。この「大学生心理学」という用語自体は新しいものではない。これまでも、都筑、菊地(1996)や溝上(2001)においてその意義・重要性が指摘されている。しかし、諸学問領域の中でどのように位置づけられ、どのような研究がその範疇に含まれるのかといった議論はなされておらず、断片的な問題提起に留まっていると言える。そこで、山田・奥田(2005)企画による「大学生心理学の構築—青年心理学と大学教育学の架橋」と題された大学教育研究フォーラムでのラウンドテーブルを基点とし、これまでの議論を発展継承し大学生固有の文脈に特化した心理学研究のあり方を提唱する。本発表では特に、「大学生心理学」の意義として、そのアプローチの独自性を検討した上で、青年心理学の視点から、大学生心理学のあり方を探ることを目的とする。

1. 「大学生心理学」の定義: 「大学生心理学」は何かということを簡潔に述べるなら「大学生自身の視点」「大学生固有の文脈」からのアプローチを目指した青年心理学の一分化体系であるということが出来る。つまり、第一に、従来の「大学生の心理学」のように研究者側の外在的視点から現象を捉えるのではなく、大学生自身の内在的視点のボトムアップ的抽出による現象へのアプローチを目指し、第二に、大学生を、彼らを取り巻く社会的・文化的・状況的文脈から切り離して考えるのではなく、むしろその文脈を分析に積極的に取り入れることによる大学生研究を目指す心理学的アプローチである。

2. 「大学生心理学」の射程: 「大学生心理学」は誰に向けて発信されるものなのか。この点を整理して臨まないと、建設的な議論に発展しにくい。簡単に分類すると、(1) 大学教員を想定した場合 (for teacher), 大学生心理学的アプローチによって見えてきた問題点を提示することで、関わり方の在り方への提言を可能とし、(2) 大学生を想定した場合 (for student), 大学生心理学的アプローチによって見えてきた大学生の特徴を提示することで、彼らの自己理解・自己形成への支援を可能とし、(3) 研究者を想定した場合 (for researcher), 大学生心理学的アプローチによって見えてきた大学生の心的ダイナミクスを提示することで、認識論的・方法論的提言を可能とする。また、「大学生心理学」の学問としての独自性はどこにあるのか。その一つに「対話性」がある。「大学生心理学」は閉じた系としてではなく、大学や大学生にまつわる様々な領域での議論に対して開かれた系を想定し、そこでの諸領域間/諸学問間の対話によって構築されていくと捉えているからである。たとえば、大学教育問題をマクロな社会制度との関わりから捉えようとする教育社会学や、より教育内容・実践そのものに対してアプローチする高等教育学/大学教育学が該当し、これに同じ大学生を対象とした青年心理学も含まれる。あくまでも心理学者という立場から、大学という社会的文脈をふまえて大学教育の主役である大学生を彼らの視点からトータルにアプローチしていくことによって、大学教育やキャンパスカウンセリングについては大学生の成長・発達に寄与する知見を提示することが可能になると考えている。

3. 「大学生心理学」構築のための青年心理学からの分化と再統合: 従来の青年心理学研究においては、脱文脈的な青年心理学やとりあえず大学生のデータを扱っているといった「大学生の心理学」が混在している状況で(文脈性問題)、領域固有の議論になってしまったり、当の大学生や大学教育への還元を意図しない対象者から遊離した研究のための研究(還元性問題)が行われていたりする。これらの指摘は青年心理学の歴史の中で(特にその初期において)常になされてきている。たとえば、文脈性問題については、Mead(1928)を始めとする文化人類学的アプローチによって、青年とは普遍的な存在ではなく社会的に構成された存在であることが示され、彼らを理解するためには彼らがどのような社会的文脈に置かれているかを考慮する必要性が指摘されている(そもそも青年という存在自体社会との関わりの中で同定されたものである)。事実、青年(期)社会学(Reuter, 1937)や青年社会心理学といった領域の構想もなされていた。また還元性問題についても、青年心理学は彼らの心理を分析するに留まらず、彼らの教育に還元していく必要があるといった指摘が多くの著名な青年心理学者によって古くよりなされている。科学的青年心理学研究への傾倒によって損なわれていった古くて新しい重要な問題を、改めて本気で考えるための突破口として「大学生心理学」を想定し、その構築のために青年心理学からの分化と再統合を行うことが急務の課題であると考えている。

(YAMADA, Tsuyoshi/OKUDA, Yuichirou)